

「下に^{のぼ}上る」

(フィリピ2:1~11)

挽地茂男

2022.12.4 日本基督教団千歳丘教会礼拝



先日ニュースを見るためにテレビのスイッチを入れましたら、いきなり「ブラボー」という声と映像が耳と目に飛び込んできました。クラシック・コンサートで演奏の素晴らしさに聴衆が叫ぶ「ブラボー」ではありません。サッカーのワールド・カップで戦前の予想をひっくり返して強豪ドイツに勝利した日本チームのメンバーの一人が発した叫びでした。その後、優勝候補の一角とされていたスペインにも勝利すると、日本チームの他のメンバーも、また応援する日本人サポーターの一部の人々まで、「ブラボー」と叫び始めたのです。決勝ラウンド、ベスト16に進出です。ベスト8、ベスト4と上^{のぼ}って行

けば、「ブラボー」の声はもっと大きくなるに違いありません。

勝利や芸術的完成度に対する賞賛だけでなく、自分の人生に「ブラボー」を言う人もいます。成功、立身出世、豊かな富、血筋・家柄、名誉…などなど。パウロは人間的価値から見て、実に誇りうるものを多く持つ人でした。彼はイスラエルではなく外国に生まれ、ギリシア的な文化と教養に親しんで育ちます。しかし一方で彼は——外国で生まれ育ったからこそなのか——ユダヤ人として、またユダヤ教徒としての誇りを強く持っていました。ユダヤ人の中のユダヤ人、筋金入りのユダヤ教徒。宗教的自覚の高さが彼の誇りでした。さらにその上に、彼はローマ市民権を持っていたのです。ローマ市民権を持っていることは、ローマに暮らす者にとって選挙権や被選挙権を含めた行政上の権利を得るだけでなく、出世には必須の条件でした。

ローマは外国人にもローマ市民権を与えました。例えば、外国からの特使^{*1}にもローマ市民権が与えられました。しかし特使が市

*1 日本人でローマ市民権を持っていた人物がいることをご存知の方は少ないと思います。その人は遠藤周作の小説『侍』の主人公のモデルとなった支倉常長(はせくらつねなが)(1571-1640)で、伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節の特使としてローマ教皇とスペイン王フィリペに謁見しました。ローマは子の伊達からの特使にローマ市民権を授与したのです。

民権を授与されるのはむしろ例外で、外国人がローマ市民権をもつ場合の大方は、国家への貢献、だいたい軍務か経済的貢献によって手に入れたのでした。おそらくパウロの場合は、ローマ国内で事業に成功した彼の父親ないし祖父の世代あたりで、市民権を高額の金銭で買ったものと推測されています。ローマ市民権は彼の一家にとって成功の印だったのです。

ローマ市民権が出世には必須の条件だと言いました。古代ローマには「クルスス・ホノルム」(Cursus Honorum)^{*2}という言葉があります。クルススは「コース」、ホノルムは「名誉」、日本語では「名誉のコース」とか「名誉のキャリア」と訳されます。いわゆる当時の公職につく勝ち組の「出世コース」です。ローマ



はすでに、紀元前3世紀くらいから競争社会であり、公職に就くものたちは鎬^{しのぎ}を削っていたのです。日本でも、国家公務員総合職試験(旧一種)に合格したキャリア官僚は、中央官庁の幹部候補生として採用され、入省・入庁後きびしい出世競争のレースを走ることになります。約3年で係長に昇進し、その後そのレースを走り切るためには10-15の公職を歴任して、定年間近になって、官僚のトップである事務次官に上り詰めます——この時にはしのぎを削っていた同期はすべてもういないのがふつうです^{*3}。あとは60歳で定年を迎えて退職し、大手企業の役員・顧問などに天下ります。

ローマの「クルスス・ホノルム(名誉のコース)」も同様の出世コースでした。詳しい説明は省略しますが、その代表的な官職^{*4}は、①護民官、②財務官、③按察官、

*2 ラテン語。「クルスス・ホノルム」(Cursus Honorum)の正確な発音は「クルスス・ホノールム」。

*3 彼が例えば、24歳で東京大学の土木系大学院を卒業して、国家公務員総合職試験に合格し、国土交通省に入省し本省の道路局企画課に配属された場合、27歳くらいで係長(3級)に昇進します。30歳くらいで海外留学で海外を経験し、その後順調に勤め上げれば、40歳半ばくらいで、県庁に外向して県土整備部長の役職を努め、その後は道路局企画課道路経済調査室長、関東地方整備局道路部長などを歴任して、50歳を超えたくらいで本省の道路局高速道路課長に就任し、本省の道路局企画課長、技術審議官を歴任して、50歳半ばくらいで、外に出て近畿地方整備局長を務めて、再度本省に帰ると道路局長から技監に、そして最終的に定年を間近にして、国交省官僚のトップ国土交通事務次官に上り詰めます——この時にはもう同期はすべていないのがふつうです。60歳で定年を迎えて退職し、大手企業の役員・顧問などに天下るというコースが、出世コースなのです。稿末の図表参照。

*4 ローマ市民権があれば、貴族(パトリキ)でなくても平民(プレブス)でも実力でこのコースを上って行けた。それらの官職は、①護民官(tribunus plebis トリブヌス・プレビス)は、平民を保護する目的で紀元前494年に創設された。のちに護民官経験者に元老院の議席が与えられるようになる。近現代において新聞名にも使われる「トリビュン(tribune)」は、この官職に由来する。②財務官(quaestor クァエストル)は執政官の下僚。平民出身者は30歳以上、貴族出身者は28歳以上。裁判を担当する者と、国家財政の監督、国庫の管理を職務とする者がいたが、特に注意がない場合は財政担当の方を指し、ローマまたは属州における財務の責任を担う。③按察官(aedilis アエディリス)は護民官と同時期の紀元前494年に設置された。36歳以上。監察官、造管官とも訳され、公共建築の管理、祭儀の管理、市場の監督などを職務とする。元々は護民官を補佐する公職。後に、この公職は主に政治的野心のある若者が就任し、ローマ人が誉れとした「クルスス・ホノルム」の手始めとして利用された。特に、上級按察官(aedilis curulis アエディリス・クルリス)は将来的には執政官(コンスル)に就任するには必ず通らねばならない公職と位置付けられていた。④財務官(praetor プラエトル)。39歳以上。財務官または按察官の経験者で、法務および他の政治的責任を担う。ローマ社会を統率する者が「執政官」と呼ばれる以前の呼称として「プラエトル」が使われていた。共和政初期には、プラエトルは軍事的な司令官の意味合いが強く、共和政ローマでは執政官に次ぐ公職で、命令権(インペリウム)を保有し、主に司法を担当した。⑤執政官(consul コンスル)元老院最上の職位。平民出身者は42歳以上、貴族出身者は40歳以上。市の政治上・軍事上の責任と重要な属領の統治責任を担う最高政務官。

④法務官、そして元老院での最高の職位である⑤執政官。これらの公職がローマの政治上・軍事上の責任と重要な属領の統治責任を担ったのです。

カエサル——英語読みするとシーザー (Julius Caesar, c.100-44 BC) ——は公職のキャリアつまり「クルスス・ホノルム(名誉のコース)」を巧みに駆け上がって行った人でした。その公職の履歴が残っ



カエサル(シーザー)

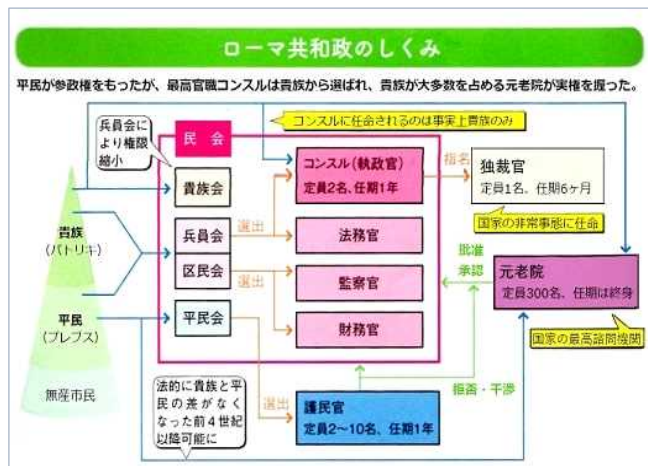
ています。彼はまず31歳で財務官(紀元前69年)、35歳で按察官(紀元前65年)、37歳で法務官(紀元前63年)^{*5}と公職を歴任し、紀元前59年41歳の時、ついに元老院の最高職・執政官に上り詰めます。政治的野心の実現

向かって、右肩上がりによりキャリアの階段を上げていったのです。シーザーの養子であったオクタウィアヌスも、実に巧みに共和制ローマ期の公職のキャリア・コースを駆け上がって行きます。そして後にローマ帝国の支配者として帝政ローマ期の扉を開き、初代ローマ皇帝アウグストゥスとなります。



ローマ皇帝アウグストゥス

「名誉のコース」は、共和政ローマ期及び初期の帝政ローマ期の、政治的・社会的な野心を持ったローマ人(主に名門の貴族階級の者)が、最高の官位である執政官(コンスル)に就任するまでに取るべき進路のことを指しているのです。ローマ市民にとって「名誉のコース」をたどって、公職を務めることは社会的名誉を達成するという彼らの存在意義に関わることだったのです。社会的名誉を追求する古代ローマ社会において、「名誉のコース」という発想形態は、個々人から地域組織まで広まっていたのです。



*5 カエサルの按察官(35歳)、法務官(37歳)への着任は規定よりも早い。



古代ローマ元老院の議場

さて今日のフィリピ書 2 章 6 – 11 節は「キリスト賛歌」呼ばれる有名な箇所です。パウロの時代に実際に歌われていた讚美歌だとも言われます。キリストの取ったコースを辿りましょう。キリストはまず第①に 神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、神の身分を棄てて、神の位置から下りてきます。「えっ。神が身分を棄てるですって？」にわかに信じがたい発言です。人の世界であれば、身分や立場を失うことは、人生の希望の大半を失うことを意味します。残るのは、他人や社会に対する憎悪と絶望です。しかしキリストのコースはさらに続きます。彼は、第②に かえって自分を無にして第③に 僕の身分になり第④に 人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、

第⑤に へりくだって。「もうやめてください」と言いたくなります。どんどん下ってきます。それでもコースはまだ続きます。彼は第⑥に 死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順(ὕπηκος)でした。

「ブラボー」……の「ブ」の字も出てきません。「キリスト賛歌」のメッセージの前に、一時的で表面的な賞賛は声を失います。薄っぺらい賞賛の言葉など何の意味もありません。この「賛歌」のメッセージの神髄に触れるとき、ただ畏敬の念と自分の罪の深さに震えるばかりです。こんなエピソードがあります。長らく大阪フィルハーモニー・オーケストラの指揮者をされた朝比奈隆氏がヨーロッパに演奏旅行をされた時のことです。演目はブルックナーの交響曲。素晴らしい演奏でした。演奏が終わり、当然「ブラボー」の叫びを期待するところですが、一言も声が上がりません。聴衆は水を打ったように押し黙って、物音一つしません。聴衆が受けた感動は、軽々しく「ブラボー」を口にすることを許さなかったのです。しばらく間をおいて、大波のような拍手が朝比奈氏に浴びせられます。

キリストが辿るコースは、明らかに出世コースとは違います。右肩上がりではなく、右肩下がりとも言える下向きの方向をとります。キリストは**名誉のコースとは逆のコースをたどるのです**。言わば「名誉」ならぬ「屈辱のコース」(Cursus pudorum クルスス・ポドルム)とも言えるべきコースです*6。しかし、この逆コースの歩みを支えていたのは、キリストの「従順」でした。人間に向けられた神の愛と思いを知り、彼は、その御心に従って下に向かっていたのです。

「名誉のコース」クルスス・ホノルムを常識とする社会では、その生涯は、まったくナンセンスな生涯です。しかし神は、**キリストの辿ったコースをよしとしたのです**。「十字架の死に至るまでの従順」にこそ、神は最大の名誉を与えまし



た。神の声なき真実の「ブラボー」が叫ばれたのです。9-11節。「2:9 このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。2:10 こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、2:11 すべての舌が、『イエス・キリストは主である』と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」下に下にと墮ちて行くように見えるキリストは、実は、「下に上^{のぼ}って」いたのです*7。

最初のキリスト者たちのなかで、イエス・キリストと出会うことによって、それまでの価値観をひっくり返された一人がパウロでした。彼は人間的価値から見て、実に誇りうるものを多く持つ人でした。ところが、キリストと出会い、キリストを知ったとき、それらの人間的価値や誇りがひっくり返され、色褪せたものになってしまったのです。パウロはその回心体験をこう語っています。フィリピ書3章5-9節。「わたし

*6 キリストは ①神の形であられたが (ὅς ἐν μορφῇ (形) θεοῦ ὑπάρχων)、神と等しい者であることを固執すべきこととは思わず (οὐχ ἄρπαγμόν ἠγήσατο τὸ εἶναι ἴσα θεῷ)、②かえって自分を無にして (ἀλλὰ ἑαυτὸν ἐκένωσεν)、③ 僕の形をとり (μορφῆν (形) δούλου λαβών)、④人間と同じようになられました (ἐν ὁμοιώματι ἀνθρώπων γενόμενος;)。人間として姿を現し (καὶ σχήματι εὐρεθεὶς ὡς ἄνθρωπος)、⑤おのれを低くして (ἐταπείνωσεν ἑαυτὸν)、⑥ 死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順でした (γενόμενος ὑπήκοος μέχρι θανάτου, θανάτου δὲ σταυροῦ)。

*7 「下に上(のぼ)る」。衆議院議員を7期務め、聖隷福祉事業団の創始者でもある長谷川保が、キリストの生涯を指して使った言葉。

は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員。熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。」パウロの中で価値観の徹底的な転換が起こったのです。

神様がイエス・キリストを人類の歴史に遣わしてくださったことは、神の私たちへの最大の贈物です。イエス・キリストの出来事が人類の歴史に起こしてきた波紋の大きさを考えるだけでも、そのことが分かります。たとえどれほど価値低き者とされている人も、すべての人がかけがえのない人格であ

ることを宣言し、どれほど敵対的な関係にある人をも愛と赦しをもって受け入れるように教えた主イエス。この主イエスをとおして、わたしたちはまた、彼を遣わした神を愛と恵みに富みたもう、身近な「天の父」として向き合うことが出来るようになりました。このイエス・キリストによって、人間の社会で常識とされていた価値体系がひっくり返されてしまう出来事が起ったのです。

クリスマスとは、神の思いが極まり、人の世界に神の思いを実現するために、イエス・キリストが地上に下っていくコースに記したその一步を確認する日でもあるのです。この一步がわたしたちの救いと成り、癒しと成り、慰めと成り、励ましと成ったのです。クリスマスを祝い、感謝し神を賛美しましょう。

アドヴェントの新しい1週間のために祈ります。

2022.12.4 日本基督教団千歳丘教会礼拝



24 歳	東京大学大学院卒（土木系）	53 歳	本省（道路局企画課長）
24 歳	国土交通省入省（本省 道路局企画課）	54 歳	本省（技術審議官）
27 歳	係長（3 級）昇進	56 歳	近畿地方整備局長
30 歳	海外留学	57 歳	本省（道路局長）
46 歳	県庁出向（県土整備部長）	58 歳	本省（技監）
48 歳	道路局企画課道路経済調査室長	59 歳	国土交通事務次官
50 歳	関東地方整備局道路部長	60 歳	退職（大手企業の役員・顧問などに天下り）
51 歳	本省（道路局高速道路課長）		

土木系官僚の出世コース